

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 8

— 平成 8 年度 —

1997. 3

香芝市教育委員会

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 8

— 平成 8 年度 —

例 言

1. 本書は、香芝市教育委員会が平成8年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。

本書には、国庫補助金対象事業以外の民間開発事業及び公共開発事業に伴う8件の埋蔵文化財発掘調査の概要を収録している。

2. 調査は、香芝市二上山博物館学芸員 山下隆次、下大迫幹洋が担当した。

3. 調査には下記の作業員、補助員が参加した。

（作業員）古山享、竹村勝、西田長治、矢野達生、山野恵三、吉岡藤雄

（補助員）島田良子、田中久美子

4. 本書の執筆は、以下の分担で作成した。

（執 筆）山下隆次、下大迫幹洋

（製 図）田中久美子

（編 集）下大迫幹洋

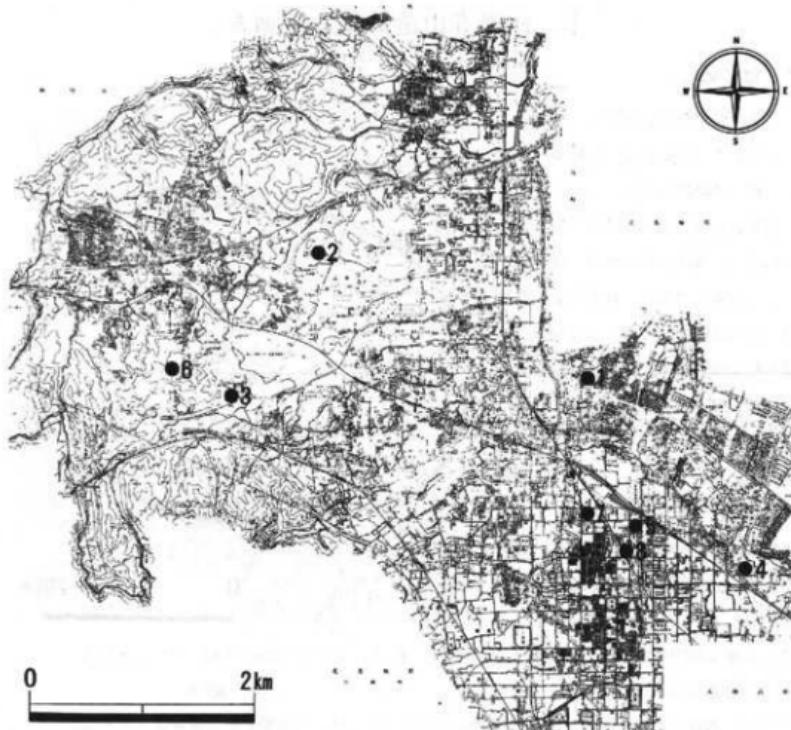
5. 各遺跡の調査記録、出土遺物等は香芝市二上山博物館（所蔵）で保管している。

本文目次

発掘調査地位置図・発掘調査一覧	1
1 法楽寺山遺跡第1次調査	(下大迫) 2
2 遺物散布地〔玉手山学園学校用地内遺跡〕	(下大迫) 6
3 田尻峠第3地点遺跡第2次調査	(山 下) 10
4 別所石塚古墳第3次調査	(山 下) 12
5 瓦口森田遺跡第3次調査	(下大迫) 14
6 遺物散布地〔N T T事業地内遺跡〕	(下大迫) 16
7 狐井遺跡96-1次調査	(山 下) 18
8 狐井遺跡96-2次調査	(山 下) 18

図版目次

- 図版 1 法楽寺山遺跡第1次調査
- 図版 2 遺物散布地〔玉手山学園学校用地内遺跡〕(1)
- 図版 3 遺物散布地〔玉手山学園学校用地内遺跡〕(2)
- 図版 4 田尻峠第3地点遺跡第2次調査・別所石塚古墳第3次調査
- 図版 5 瓦口森田遺跡第3次調査・遺物散布地〔N T T事業地内遺跡〕
- 図版 6 狐井遺跡96-1・96-2次調査



第1図 平成8年度発掘調査地位置図 (S = 1/50,000)

平成8年度調査地一覧（国庫補助金対象事業以外）

No.	遺跡名	調査次数	調査地	調査期間	開発内容	調査面積
1	法楽寺山遺跡	第1次	下田東5丁目636-1番地他	平成8年 4/1~5/10	宅地造成	100m ²
2	遺物散布地 (玉手山字園学校用地内遺跡)	第1次	今泉1172-1番地の一部	5/21~7/26	学校用地造成	1,400m ²
3	田尻峠第3地点遺跡	第2次	穴虫3310,3311-1他	6/25~7/18	住宅建築	290m ²
4	別所石塚古墳	第3次	別所95-1番地他	8/1~9/7	道路建設	70m ²
5	瓦口森田遺跡	第3次	五位堂582-1,-2	11/26~12/3	集合住宅建築	80m ²
6	遺物散布地 (NTT事業地内遺跡)	第1次	穴虫3285-3,3333-1	平成9年 2/11~3/8	鉄塔建設	80m ²
7	狐井遺跡	96-1次	狐井356-1	9/3~9/4	分譲住宅建築	40m ²
8	狐井遺跡	96-2次	五位堂474-1	9/19~9/21	共同住宅建築	30m ²

1. 法楽寺山遺跡第1次調査

I はじめに

法楽寺山遺跡は、香芝市の北西部、下田東五丁目付近を中心とし、繩文時代の遺物散布地である。

遺跡は、標高約70m前後の馬見丘陵西南部の丘陵南西斜面から丘陵裾部を中心に展開しており、丘陵斜面一帯には、組合式石棺を直葬した法楽寺山古墳や松里園古墳群（上牧町）などの古墳時代中期から後期にわたる小規模な円墳数基が点在していたことが知られている（現在は消滅）。また、丘陵裾部を近接して流れる葛下川沿いには、下田東遺跡等の繩文～古墳時代の遺物散布地が点在しているが、発掘調査の事例ではなく、法楽寺山遺跡とともに遺跡の正確な範囲や性格等いまだ実態が

不明な遺跡が多いのが現状である。

今回の調査は、宅地造成工事のため平成7年11月8日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因するもので、松里園古墳群や法楽寺山古墳等の古墳群にかかる何らかの遺構や遺物の検出が予想された地域である。

現地調査は平成8年4月1日から同年5月10日まで実施し、調査総面積は100m²であった。

II 調査の概要

発掘調査は、古墳状隆起と推定される丘陵頂部の高まりを中心に東西南北一辺4mの調査区（第1～4調査区）を4箇所、また、古墳墳丘の規模を確認するため、丘陵頂部から丘陵中腹斜面にかけて東西方向に幅2m×長さ20mの調査区（第5調査区）を1箇所設定して全て人力による掘削作業を実施した。

表土（腐葉土）を除去すると黄褐色砂質土層（地山の風化堆積土）となり、現地表下約20～30cmの地点で地山の黄褐色砂質土層に至る。丘陵の基盤層は、砂（細～中粒）と粘土の互層で構成されており、特に丘陵中腹では複雑な互層を成す。



第2図 法楽寺山遺跡位置図 (S = 1/6,000)

1. 第1次調査地

古墳状隆起の中心部に相当する丘陵頂部で石室や粘土構造等の埋葬施設や埴輪列などの外部表象施設等は検出されず、また、真美ヶ丘ニュータウン造成工事の際に削平された調査区東側の丘陵断面の土層堆積状況からもみても、この高まりは人工的に構築された古墳ではなく、自然丘陵の高まりであることが判明した。しかし、特に第1・2調査区北側付近の表土や堆積土中には少量の弥生土器片が包含されていたため、第1・2調査区の北辺3mを拡張して遺構の検出作業を実施したところ第1調査区の拡張区域内で土坑1基を検出した。

以下、検出遺構及び出土遺物の概要について簡略に記す。

(1) 検出遺構

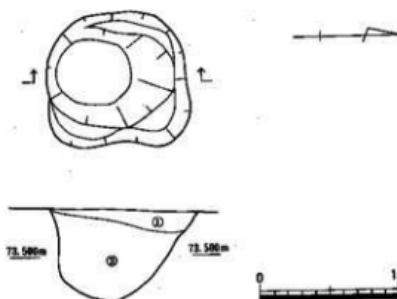
土坑（SK-01）は、長径80cm、短径50cmの平面形態梢円形を呈する土坑で、深さは最深部で検出面より60cmを測る。土坑内は地山である黄褐色砂質土層塊を含む单一土層で埋積されており、部分的に微量の炭化物を含有する。土坑内からは弥生時代後期の錐体部破片1点と土器細片のほか、縄文時代の混入遺物と推定されるサヌカイト製の石器（無茎式）1点が出土した。

(2) 出土遺物

表土や堆積土中からは約8点の弥生土器片が出土している。いずれも細片であり、摩滅・風化が著しいため遺存状態は良好ではないが、図示可能な5点についてのみ掲載することとする。

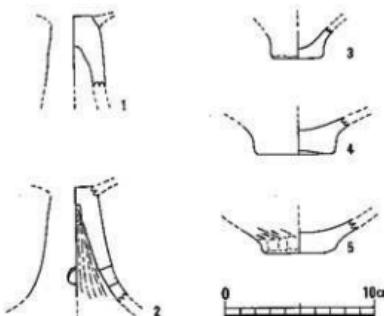
1、2は高環脚部である。いずれも器表面が剥落しているため調整は不明であるが、2には三方向の透孔が穿孔されており、脚部内面には成形時のしづら痕を明瞭に残す。

3は鉢底部、4、5は壺もしくは、壺底部である。表面の剥落が著しいため調整度をほとんど止めないが、5にはかすかに成形時のタタキ目と指頭圧痕がみられる。1～5いずれも形態的特徴から弥生時代後期の帰属時期が考えられる。

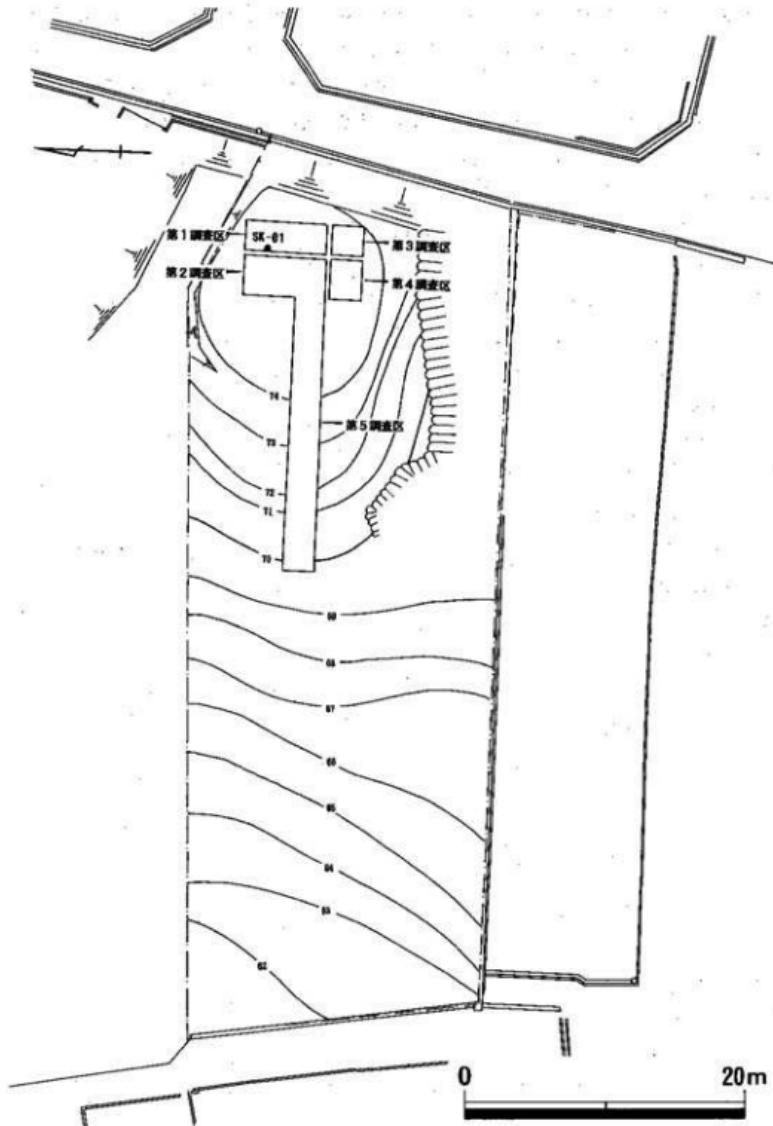


第3図 SK-01平面・土層断面図 ($S = 1/40$)

① 灰褐色砂質土 ② 黄褐色砂質土層塊含む



第4図 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)



第5図 地形測量図 ($S = 1/400$)

III まとめ

当初予想されていた古墳に関連する遺構や遺物は検出されず、意外にも弥生時代後期の土坑1基を確認した。弥生土器は主に第1調査区の堆積土層中から東側の調査区域外（開発予定区域外）にかけて集中して分布、広がっていく傾向があることから、これ以外にも弥生時代の遺構が存在した可能性は高く、真美ヶ丘ニュータウン造成工事の際に既に宅地化された調査区東側の開発区域外に弥生時代の遺構の中心が展開していたものと考えられる。

香芝市内では、近年、市内中央部に所在する藤ノ木丁遺跡や狐井遺跡から弥生時代中期～後期の土器片などが発掘調査によって出土しており、これまで希少と考えられていた市内の弥生時代の遺構や遺物が増しつつある。中でも、今回、丘陵上で検出された弥生時代後期の土坑は丘陵下の平野部との比高差約22mという極めて特殊な地理的環境に立地しており、藤ノ木丁遺跡や藤山遺跡等の市内の主要遺跡をはじめ、当麻町の竹之内遺跡等の北葛城地域の主要な弥生遺跡を眼下に配することができる。検出された遺構は土坑1基のみであるため、この種の遺構の性格等については不明であるが、視界の開けた高台に立地していることから、何らかの高地性の集落が存在していた可能性は充分考えられる。

今回、単発的ながらも馬見丘陵域で弥生時代の遺構が検出された意義は大きく、市内外を含めた今後の周辺調査の進展に期待される。

（文責 下大迫 幹洋）

2. 遺物散布地（玉手山学園学校用地内遺跡）

I はじめに

（1）調査の契機と経過

今回の発掘調査は、「(仮称) 関西医療福祉大学」新設に伴うグランド造成工事及び管理棟建設を原因とする造成工事の事前調査であり、「学校法人 玉手山学園」を事業主体とする。

まず、学校用地造成に伴う開発事業総面積が29,980m²と10,000m²を越える大規模開発に該当するため、事業主体である学校法人玉手山学園理事長江端文行氏から平成8年11月8日付けで奈良県教育長宛に提出された「遺跡有無確認踏査願」に基づき、奈良県教育委員会から依頼を受けた香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が平成7年12月20日～同年12月22日にかけて開発予定地域内全域に亘る踏査を実施した。

踏査の結果、開発予定地一帯は雜木が生い茂り、腐葉土が堆積した山林であるため、地表面では土器片等の遺物散布は認められなかったものの、丘陵基盤である安山岩質の石材を露呈した2基の古墳状隆起を新たに確認し、周辺遺跡の分布状況から古墳以外にも火葬墓等その他の遺跡の存在も充分予想されたため、平成8年1月19日付けで奈良県教育委員会から発掘届出書の提出が要請された。その後、平成8年1月30日付けで玉手山学園から「発掘調査届出書」が提出、同年3月1日付けて奈良県教育委員会からの発掘調査に関する通知を受けて、香芝市教育委員会が調査方法や調査日程等について事業者と発掘調査に関わる協議を実施した。

なお、開発予定地域一帯は金剛生駒国定公園内に位置することから自然公園法第17条（第18条、第18条の2）第3項の規定に基づき平成8年2月28日付けで香芝市都市計画課を通じて発掘調査に関わる「特別地域内土地の形状変更許可申請書」を奈良県風致保全課に提出し、同年3月27日付け（奈良県指令風保第26号の79）で申請許可後、所定の規定に基づき発掘調査を実施した。

現地調査は平成8年5月21日から同年7月26日まで実施し、最終的な調査総面積は1,400m²であった。

（2）遺跡の位置と環境

玉手山学園学校用地内遺跡（仮称）は香芝市中央部の香芝市上中に位置する。この地域は、明神山（標高274.9m）を頂部とする標高130m前後の丘陵南側末端部に相当し、二上層群の明神山火山岩で形成される溶岩台地上に立地する。このため、丘陵の基盤層は明神山の火山活動の産物である安山岩を基調とするが、今回の調査地の位置する丘陵西端部は砂質土層である大阪層群の「関屋砂層」で形成されている。岩盤上においても土壤化した風化土層の介在する丘陵南側～東側斜面一帯には、横穴式石室を有する山口古墳や上中ヨロリ1・2号墳等の古墳時代後期の小規模な数基の古墳が点在するのをはじめ、当丘陵南東の藤山丘陵には小規模な円墳数基から成る藤山・北今市古墳群が所在する。また、東方に隣接する今泉遺跡では、顕著な遺構や遺物は未検出であるものの、昭

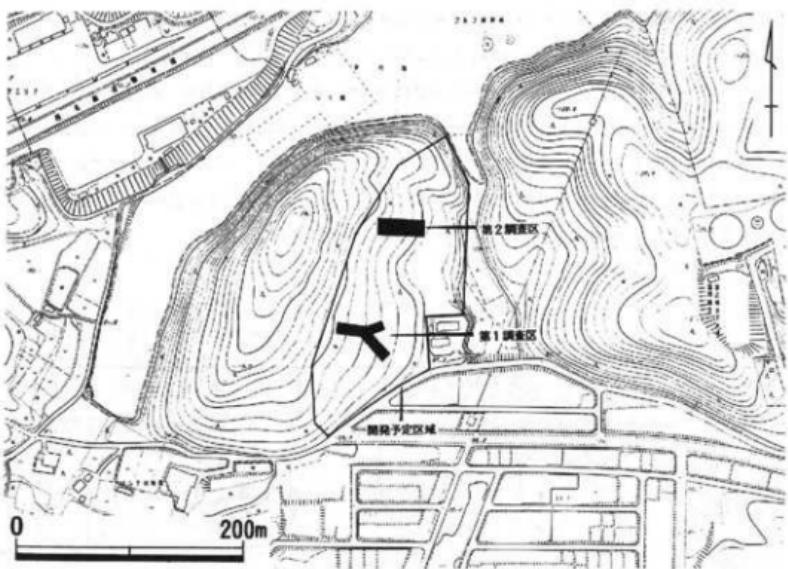
和60年～61年に実施した「旭ヶ丘土地区画整理事業」に伴う事前発掘調査では丘陵東側斜面から弥生時代や奈良時代、中世に亘る多数の土器片が検出されている（佐藤 1986）。

なお、周辺地主の証言により、昭和20年の果樹園開墾の際に丘陵東側斜面の横穴式石室と推定される石室内から鞘口金具の下端に環付足金具を有する飛鳥時代の銀装大刀1振と同じく東側斜面から奈良時代の火葬骨を納めた骨藏器（須恵器製）が出土していたことが明らかにされており（平成7年7月付で二上山博物館へ寄贈）、開発地域を含めた付近一帯には周知の遺跡以外にも未知の埋蔵文化財が存在する可能性も十分に予想された地域である。



第6図 玉手山学園学校用地内遺跡位置及び周辺遺跡 ($S = 1 / 20,000$)

1. 玉手山学園学校用地内遺跡
2. 今泉遺跡
3. 武烈陣指定地
4. ガモ池遺跡
5. 伝今泉出土解装人刀出土地
6. 上中ヨロリ1号墳
7. 上中ヨロリ2号墳
8. 山口古墳
9. 間宗陵古墳（間宗陵指定地）
10. 遺物散布地
11. 藤山遺跡
12. 藤山1号墳
13. 藤山2号墳
14. 間氏居館跡遺跡
15. 穴虫西遺跡
16. 威奈大村骨藏器出土地
17. ヘ蒙ド城跡
18. 逢坂城跡
19. 高山大葬墓
20. 高山石切場跡



第7図 玉手山学園学校用地内遺跡調査区配置図 ($S = 1/5,000$)

II 調査の概要

玉手山学園学校用地内遺跡の所在する丘陵一帯は昭和61年から実施された「旭ヶ丘土地区画整理事業」に伴う宅地造成工事の際に大半が宅地化されており、開発予定地の南側まで大きく地形が改変されている。

しかし、今回の開発予定の丘陵域は旧地形を止めており、西側および北側は分川池が丘陵域を取り囲み、あたかも独立山塊状を成す。丘陵の西側は急斜面であるが、西側に比して東側は傾斜も緩く裾部では平坦な地形となっている。開発計画によると、学校用地はこの丘陵東側の平坦部を中心に主要施設が配置され、工法的には丘陵裾部を一部削平し、削平した土砂を埋め立てて造成する埋立工法による造成方法であった。このため、主に埋立工法による事業地は調査対象地から除外し、とりあえず造成工事によって破壊される丘陵尾根筋を中心に調査区を設定して遺構や遺物の有無確認のための試掘調査を実施した。

発掘調査は、開発予定区域南側に火葬墓の立地条件上、好条件を行する南東方向に派生する低丘陵域に幅4m、長さ総延長100mの調査区〔第1調査区〕を1箇所、また、開発予定区域北側に古墳状隆起と推定される隆起箇所を中心に幅20m、長さ50mの調査区を1箇所〔第2調査区〕設定してともに発掘調査区域内の木々の伐採後、重機と人力による発掘作業を実施した。

第1・2調査区とも堆積層は浅く表土（腐葉土）直下約20~30cm足らずの地点で地山の黄褐色砂質土層に至る。第2調査区内の古墳状隆起からは石室等の埋葬施設や土器片等の遺物も検出されず古墳状隆起は、丘陵基盤を構成する下位の岩盤層と岩盤層上位に堆積した堆積土層（砂質土層）の地層の不整合によって生じた地崩れや木株の隆起等によって長年に亘って形成された自然地形の高まりであることが判明した。

第2調査区では顕著な遺構や遺物は検出されなかったものの、第1調査区では、北西方向に流れる流路跡1条を検出した。流路跡は幅3m、深さ1.3mで断面は緩やかなU字形を呈する。流路内は静錐堆積を示す細～中粒砂の砂質土が互層を成しており、流路跡からは奈良時代？の土師器片とサヌカイト製石器の剥片数点が出土した。流路の形状や断面形態から城を取り囲む濠跡等の人為的に掘削された流路跡とは考え難く、低丘陵の尾根間を流れる小規模な自然の流路跡と考えられる。

上記の通り、少量の遺物が出土したものの顕著な遺構や遺物は存在しなかったことから調査区の拡張等開発区域全面に亘る本格的な発掘調査は不要と判断し、写真撮影および図面作成後、試掘調査を終了した。

III まとめ

周辺遺跡の分布状況から、何らかの古墳に関わる遺構や遺物の検出が予想されたが当初予想されていた古墳状隆起は古墳ではなく、また古墳に関わる遺構等は全く検出されなかった。このことから当丘陵域における古墳分布は当地域にまでおよばないことが明らかとなった。しかし、古代の主要街道沿いから遠く離れた裏山の山中に位置する当地域内で少量ながらも古代の土器片が出土した意義は大きく、予想通り周辺地域に火葬墓等の何らかの遺跡が存在していたことを傍証している。周辺地主の証言では、当丘陵上では現在周知されている古墳以外にも昭和初期の果樹園等の開墾に伴い、古墳や遺物が出土したことが指摘されていることから、周辺には未知の埋蔵文化財が埋蔵されている可能性も強く、特に今後の大規模開発にあたっては慎重に対処していく必要がある。

（文責 下大迫 幹洋）

参考文献

- 佐藤良二 1986 「旭ヶ丘I - 土地区画整理事業に伴う昭和60年度発掘調査概報 -」
香芝町旭ヶ丘I地区画整理組合・香芝町教育委員会編

3. 田尻峠第3地点遺跡第2次調査

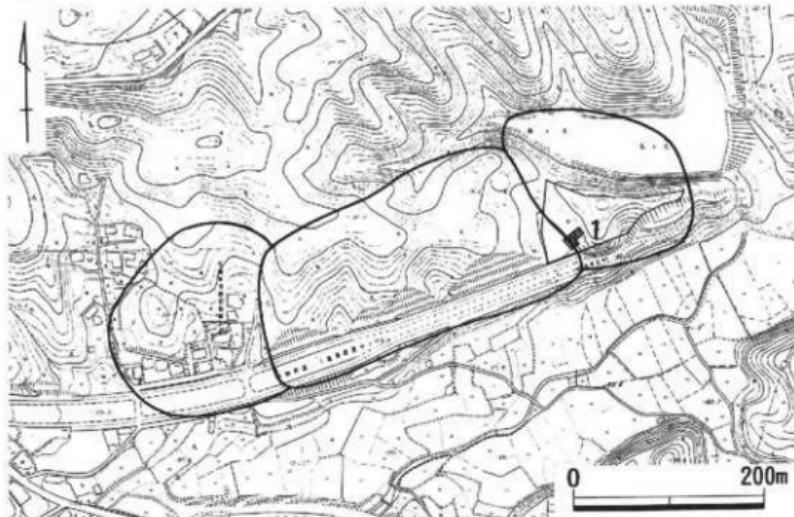
I はじめに

田尻峠第3地点遺跡は奈良県香芝市穴虫に所在する二上山北麓遺跡群の1つで、同志社大学旧石器文化談話会によって昭和44・45年に発見された（同志社大学旧石器文化談話会編 1974）。昭和62年度、中和幹線建設に伴って田尻峠第1・2・3地点遺跡の発掘調査が実施された。その結果、第1地点遺跡では槍先形尖頭器（「石槍」）未製品が多く出土し、第2地点遺跡では少量の槍先形尖頭器（「石槍」）未製品等の石器が出土したほか、奈良時代の遺構が検出されている。そして、第3地点遺跡では流水に伴う溝の埋土下層から、多数の黒色器面を呈するサヌカイト片が出土し、第1～3地点遺跡全体で、整理箱で約800箱の遺物が出土している（佐藤良二 1983, 1989）。

II 調査の概要

今回の発掘調査は、宅地造成工事のため平成8年6月12日付けで事業者から発掘届出書が提出され、香芝市教育委員会が事業者と協議して発掘調査を実施することになった。

現地調査は6月25日から調査地の草刈りを開始し、草刈り終了後、全体の地形をみて、東斜面の中央に8m×30mのトレンチを設定して、重機で掘削を開始した。



第8図 田尻峠第3地点遺跡位置図

1. 第2次調査地

遺物は表土内に包含されていたが、表土を除去すると、直下で地山が検出された。この地山の面で平面を精査したところ、炭が詰まった直径約30~60cmのピットが斜面に平行して、約2m間隔で数個並んで検出された。

当初、田尻峠第2地点で検出されたものと同様の、奈良時代の遺構（火葬墓？）の可能性を考えて慎重に調査したが、遺物等は全く出土しなかった。後日、地主の話によると、戦前にぶどう畑として開墾し、ぶどうの根元の土が流れないように穴を掘って、肥料とともに炭や石を入れたということであった。

なお、斜面の下方では地山が凝灰岩の岩盤となっており、トレンチ南端でこの凝灰岩を掘削した遺構の一部が検出された。そのため、トレンチを南へ5m×10m拡張した。その結果、幅約4m、深さ約1~2.5mの大規模な掘り込みが、南へ長さ10m以上にわたって検出された。床面には幅20~30cmの溝が壁沿いなどでみられ、溝の底からは腐食した木材とカスガイが出土した。当初、この構の性格が全くわからなかつたが、遺構の状況からそう古くないことが予想された。地主の話から、戦時に陸軍が作った、八尾空港のガソリンタンク貯蔵施設であることが判明した。そのため、この遺構は南へ続いているが、トレンチを拡張せず、7月17日にラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行い、翌18日に機材を撤収して現地調査を終了した。実働は17日、調査面積は290m²であった。

IIIまとめ

今回の調査で遺構は検出されなかつたが、遺物は斜面で多數出土した。遺跡の中心が東方の丘陵頂部に存在する可能性が高い。昭和62年度の調査では、西方の第1地点遺跡から東方の第3地点遺跡へいくにしたがつて、遺物の量も少なくなつていたが、今回の調査でも同様の結果となつた。今後、丘陵頂部の開発においては十分注意する必要がある。

（文責 山下 隆次）

参考文献

- 高田勉ほか1974 「田尻峠第3地点遺跡」『ふたがみ』
- 佐藤良二 1983 「香芝町田尻峠第2地点遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県教育委員会
- 佐藤良二 1989 「田尻峠－中和幹線建設事業とともに発掘調査概報－」香芝町教育委員会

4. 別所石塚古墳第3次調査

I はじめに

別所石塚古墳は、馬見古墳群の南西端に位置する古墳時代中期の古墳である。真美ヶ丘ニュータウンの区画整理事業計画で、ニュータウンと国道165号線を結ぶ都市計画道路路線にかかっていたため、昭和45年に後円部の主体部が調査された。その結果、大部分が盗掘によって破壊されていたが、排水用のパラスが敷きつめられた粘土帯が検出され、出土した遺物から5世紀代の古墳であることが確認された。その際、墳丘を含む周辺の地形測量が行われ、全長約90~100mの二段築成の前方後円墳であることが推定された(白石・前園 1974)。

この調査結果に基づいて、当古墳を保存するために都市計画道路は後円部の西側を通るように計画変更された。

しかし、翌昭和46年に後円部の大部分が土地所有者によって削平され、現在では後円部の東側のみ墳丘の名残をとどめるだけである。

II 調査の概要

今回の発掘調査は、香芝市都市計画道路建設のため平成6年3月11日付けで、事業主体である香芝市長から発掘通知書が提出されたことに始まる。この計画では現在からうじて残っている後円部から前方部の墳丘を削って法面とし、道路を建設するというものである。したがって、この工事が完成すると当古墳の旧状をとどめる墳丘はすべて消滅することから、当古墳における発掘調査は今回が最後となる。

調査は今年の1月に実施した試掘調査によって、墳丘が地山を削り出して成形したあと盛土して築成されていることが確認された。しかし、後世の土取り等によって墳丘の大半が削られ、本來、



第9図 別所石塚古墳位置図

1. 第1次調査地 2. 第2次調査地 3. 第3次調査地

墳丘の表面を覆っていたと考えられる葺石や埴輪の樹立については確認することができなかった。また、当初、その存在が予想された周濠については、墳丘裾から延長したトレンチの観察によって存在しないことが確認された。この調査結果を踏まえ、今回の調査は最も墳丘の旧状をとどめる部分を全面発掘して葺石や埴輪の樹立、及びその痕跡を確認し、また、従来の推定通り墳形が前方後円墳であるかどうかについても検討することを目的とした。

調査は8月1日から調査地内の立木を伐採し始め、道路建設予定地内の墳丘部分において北側で幅6m、南側は幅4m、長さ16mのトレンチを設定し、翌2日から掘削を開始した。その結果、試掘調査と同様、後世の土取りや開墾で墳丘盛土の大部分が削平されており、わずかに墳丘盛土の一部が残る程度であった。したがって、原位置を保つ葺石や埴輪の樹立については全く確認されず、葺石と考えられる拳大の石や埴輪片が堆積土中に包含されているのみであった。しかし、試掘調査では後世の水田造成に伴う溝で削平されていたため確認できなかった墳丘基底部が、今回の調査ではわずかに弧を描く状態で明晰に残っていた。また、トレンチ内で確認した墳丘基底部の南側で近世の水田耕作に伴うと考えられる素掘りの井戸（直径約1.5m、深さ約3m）を検出した。

なお、井戸から遺物は出土しなかった。

III まとめ

今回の調査では、第2次調査で確認できなかった墳丘基底部が確認されたことが大きな成果である。また、墳丘の断ち割りによって、墳丘1段目は自然の丘陵を利用した地山削り出しによる築成であることを確認した。そして、墳丘1段目のくびれ部に近いところで墳丘を断ち割ったところ、古墳築成に伴う盛土がほとんど確認できず、表土直下で地山が検出された。この地山は前方部と推定される南の方向へはいかず、現状の地形通り南東方向へ続いている。したがって、墳形は東側の墳丘1段目においては前方後円形にはならないことは確実である。また、従来の推定通り前方後円墳であるとすれば、東側は墳丘2段目より上の部分がそうであろう。

しかし、西側については現在、自動車教習所の練習コースで大きく改変を受けているものの、1段目から前方後円形を呈していた可能性は否定できない。いずれにせよ、北及び西から見ればかなり大きな古墳に見えたことであろう。

なお、墳形についてはすでに墳丘が大きく破壊されているため、今後、くびれ部において調査する機会を得たとしても最終的に前方後円墳であったかどうかの結論は出せないと思われる。

（文責 山下 隆次）

参考文献

- 白石太一郎・前畠実知雄 1974 「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊』奈良県教育委員会

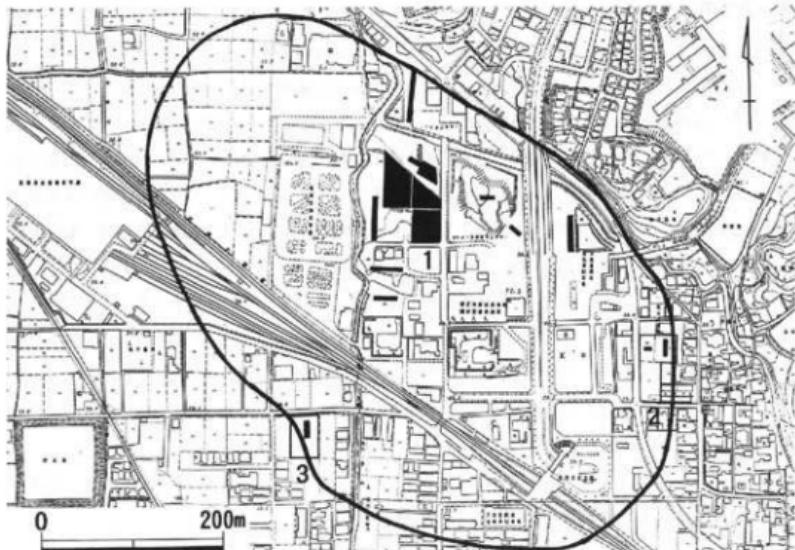
5. 瓦口森田遺跡第3次調査

I はじめに

瓦口・森田遺跡は、香芝市の南東部、瓦口一帯の平野部に広がる遺跡である。当遺跡は、昭和62～63年にかけて実施された「五位堂駅前区画整理事業」に伴う事前発掘調査で縄文時代後・晩期の流路跡や河川の洪水によって埋没した中世の水田耕作に伴う人や牛・馬の足跡群が検出されたことから、縄文時代から中世にわたる複合遺跡であることが明らかとなった（佐藤 1989）。

遺跡は、大和川の一主流である葛下川沿いに形成された標高約53～55m前後の沖積低地上に立地しており、遺跡の北西約300mには、縄文時代早期から晩期の遺物散布地である下田東遺跡が、また、南西約300mには、縄文時代前期後半～中期初頭の大量の土器や石器等が出土した狐井遺跡など、奈良盆地平野部において縄文時代の遺跡が集中して分布する地域として注目されている。今回の調査は、マンション建設のため平成8年8月27日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因するもので、第1次調査で確認された縄文集落に伴う遺構の展開や洪水に埋没した中世の水田耕作遺構の分布域等遺跡の南西端の様相を把握することを調査の主要な目的として実施した。

調査は平成8年11月26日から同年12月3日まで実施し、調査面積は80m²であった。



第10図 瓦口森田遺跡位置図 (S = 1/6,000)

1. 第1次調査地 2. 第2次調査地 3. 第3次調査地

II 調査の概要

発掘調査は、事業対象地域中央部に幅4m×長さ20mの南北方向の調査区を設定して重機と人力による発掘調査を実施した。

調査区の基本層序は、上から①暗茶色粘質土層〔層厚20cm〕、(現代の耕作土) ②黄褐色砂質土層〔層厚15cm〕(現代耕作土の床土)、③灰色粘質土層〔層厚25cm〕(普遍的に中粒砂混) ④灰色砂質土層〔層厚10cm〕(細～中粒砂)。洪水砂層)、⑤黄褐色粘質土層〔層厚35cm〕(上面で素掘溝検出。層下位にマンガン粒沈殿)、⑥灰色砂質土層〔層厚25cm〕(やや粘質)、⑦暗灰褐色砂質土層〔層厚30cm〕となり、現地表下約1.6m下位の地点で基盤層である⑧暗茶褐色砂質土層〔層厚40cm〕(硬質)に至る。各層中とも土器等の遺物の包含状況は希少であったが、中でも、特に中世の耕作面および水田造成に伴う客土層である第5層中には中世の土器片に混在して縄文時代後・晚期の土器片やサヌカイト製石器の剥片が散在的に包含されていた。

第5層の黄褐色粘質土層上面で調査区を東西方向に延びる中世の素掘溝群を検出したが、時間的な制約から中世の素掘溝を面的に検出することは断念し、素掘溝の埋没深度や方向等の調査区東西両壁の土層による断面観察にとどめ、第1次調査の結果から、特に縄文時代の遺構の検出が予想される第8層(暗茶褐色砂質土層)上面での遺構検出作業を実施した。

中世の耕作面および水田造成に伴う整地土層である第5層中に散発的に縄文時代後・晚期?の土器片が包含されていたものの、基盤層上面で顕著な遺構や遺物は検出されなかつたため、調査区の拡張等の本格的な発掘調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成および写真撮影終了後、発掘調査を終了した。

III まとめ

今回の調査によって、第1次調査で確認された中世の埋没水田や縄文集落に伴う遺構は当地までおよばないことなど瓦口・森田遺跡の南西限の様相や、また、縄文時代から中世に至る当地域における軟弱で不安定な地理的古環境を把握することができた。

顕著な遺構や遺物が検出されなかつたものの、水田造成に伴う整地土中からは中世土器に混じって散発的ながらも縄文時代後・晚期と推定される土器片が含有されており、付近に縄文集落に関わる遺構が存在したことを裏付けている。当遺跡の正確な範囲や性格等まだまだ不明な点が多く残されているが、今後の周辺地域の調査の進展によって当遺跡の諸相が明らかになるものと思われる。

(文責 下大迫 幹洋)

参考文献

佐藤良二 1989 「瓦口森田遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会

6. 遺物散布地（N T T事業地内遺跡）

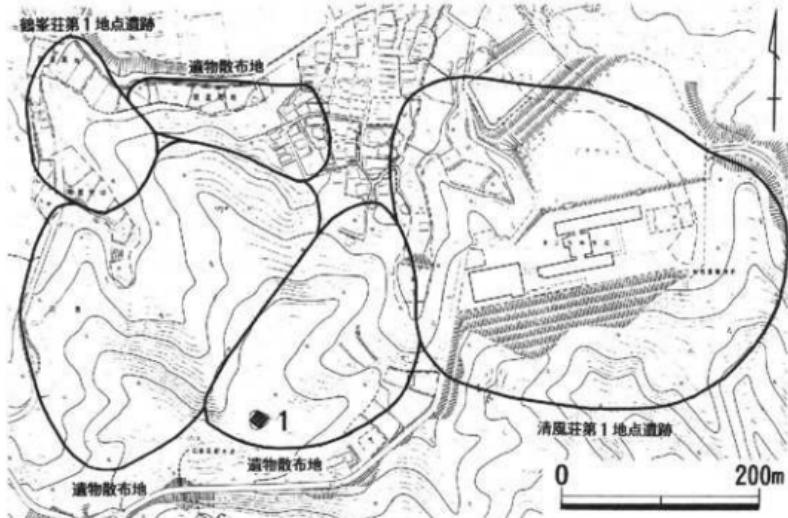
I はじめに

当遺跡は、香芝市西部の二上山北麓に所在する弥生時代を主要な帰属時期としたサヌカイト製石器の散布地である。遺跡の所在する二上山北麓の丘陵域は、二上山の火山活動に由来する二上層群中のドンズルボー累層や原川累層、河湖堆積作用によって生成された古大坂層群中の瑞宝園互層等の数種の地質が入り組んだ二上山麓特有の複雑な地質的様相を呈する。

遺跡の周辺約500m圏内には鶴峯荘第1～6地点遺跡や田尻峠第1～4地点遺跡等の旧石器時代から縄文・弥生時代に亘る石器生産遺跡が集中して分布しているのをはじめ、当遺跡の南方に派生する上部ドンズルボー層域の丘陵域には、穴虫石切場等の凝灰岩を切り出した数基の石材切出場跡が点在している（松田 1981）。

今回の調査は、鉄塔建設のため平成8年8月8日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因するもので、当丘陵上の地質的環境や遺物の分布状況等これまで不明確であった当遺跡の諸相を把握するということのみならず、丘陵尾根上の高所に立地するという地理的環境から石器生産遺跡の他にも弥生時代の高地性集落等の未知なる遺跡が検出される期待がもたれた地域である。

現地調査は平成9年2月13日から同年3月8日まで実施し、調査総面積は144m²であった。



第11図 遺跡位置図 (S = 1/6,000)

1. 第1次調査地

II 調査の概要

発掘調査は、鉄塔建設箇所に幅8m×長さ18mの南北方向の調査区を設定して重機による表土層除去後、以下、人力による発掘調査を実施した。

調査区の基本層序は、表土の①暗茶色砂質土層（腐葉土層）〔層厚20cm〕を除去すると風化堆積土層である②黄褐色砂質土層〔層厚20cm〕となり、現地表下約40cm下位の地点で砂質土に礫岩を含有する地山の③黄褐色砂礫層に至る。各層中に遺構は皆無であったが、第2層中に少量のサヌカイト製石器の剥片が散在的に包含されていたため、サヌカイト製石器の採集を主眼として調査を実施することとした。

サヌカイト製石器の剥片は、層中の特定域に集中して分布するという傾向はなく、第2層中に散在的に包含されていた。これらの石製品の中には完成品や未製品を指向した剥片等は認められないため、帰属時期は不明であるが、比較的風化度の新しいものが多いことから周辺遺跡と同様、おおむね、弥生時代を帰属時期とした石器生産遺跡であることが想定される。

現地調査は、調査区域内での遺物採集および地質資料用のサンプル採集後、写真撮影や図面作成等の一連の記録保存調査の過程を経て当遺跡の発掘調査を終了した。

III まとめ

今回の発掘調査によって從来から指摘されていた当地域における地質的様相を再確認するとともに、サヌカイト製石器剥片の包含状況・分布密度の把握等はじめて当遺跡の一端をうかがい知ることができた。地理的・地質的環境の差異によるせいか、当遺跡では、桜ヶ丘第1地点遺跡等のサヌカイト製石器の剥片を多量に包含する二上山北麓の著名な石器生産遺跡に比して石器の分布・包含密度も極めて少ないとから、二上山北麓に所在する石器生産遺跡の中においても比較的存続時期の短い遺跡であることが推察される。

当遺跡の正確な範囲等まだまだ不明な点が多く残されているが、今後の周辺地域の調査の進展によって地質的古環境も含めた当遺跡の諸相が明らかになるものと思われる。

（文責 下大迫 幹洋）

参考文献

松田真一 1981 『穴虫石切場遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編

7. 狐井遺跡96-1次調査

I はじめに

狐井遺跡は狐井集落の東方、通称狐井丘陵の南東一帯に広がる遺跡である。これまでの調査で縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明した。

平成5年に宅地造成に伴って実施した調査では、近畿地方でも資料の少ない縄文時代前期後半から中期初頭の土器片約3,000点のほか石鐵600点以上などのサヌカイト製石器類や獸骨（イノシシ・シカ）などが出土した。また、平成7年の個人住宅建築に伴う立会調査では直径、深さとも約1mの貯蔵穴と思われる土坑の底から縄文時代前期の土器片に伴って石皿2点が出土するなど、当遺跡の重要性が指摘されている。

II 調査の概要

共同住宅建築に伴い平成8年9月3日～9月4日にかけて約40m²を調査した。

調査地は改正池の北西約100mの地点で、遺跡推定範囲の北端にあたる。昨年、今回の調査地の西側において調査を実施し、遺構は検出されなかったが地山直上の整地土から須恵器片や埴輪片が出土した。

調査は開発予定地の中央から南へ2m×10mのトレンチを2本設定して掘削した。その結果、昨年の調査地と同様に遺構は検出されなかったが、現地表面から深さ約50cmで検出した地山直上で須恵器片や埴輪片が出土した。

8. 狐井遺跡96-2次調査

I 調査の概要

共同住宅建築に伴い平成8年9月19日～9月21日にかけて約30m²を調査した。

調査地は平成5年に縄文時代前期後半から中期初頭の土器や石器が大量に出土した地点から南東約250mのところで遺跡推定範囲の東端にあたる。

調査は2m×15mのトレンチを南北に設定し、おもに重機で掘削した。その結果、トレンチ中央から北側で幅約3.5mの南西から北東方向の自然流路を検出したが、遺物は皆無であった。

（文責 山下 隆次）

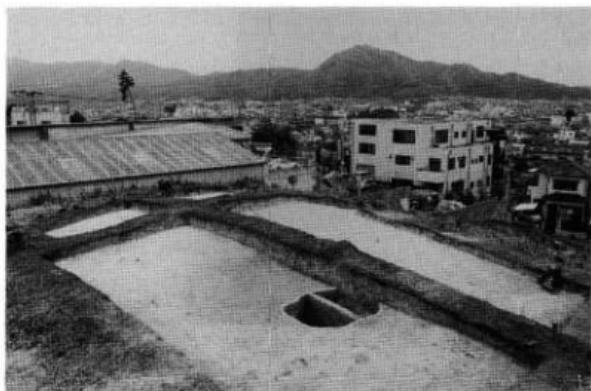


第12図 狐井遺跡位置図 (S = 1/6,000)

1. 96-1次調査地 2. 96-2次調査地
3. 平成5年調査地 4. 石皿出土地

図 版

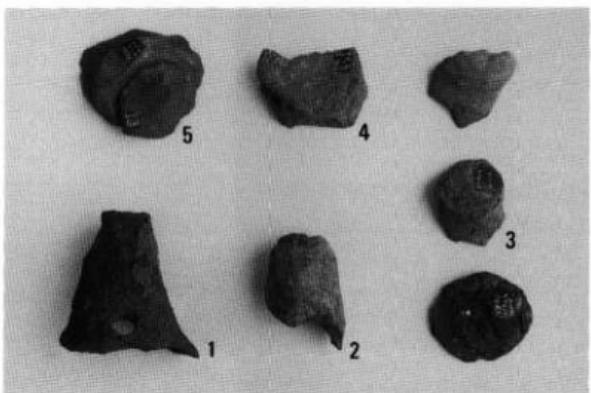
図版 1 法楽寺山遺跡第1次調査



調査地遠景
(北東から)



SK-01
(東から)



出土遺物

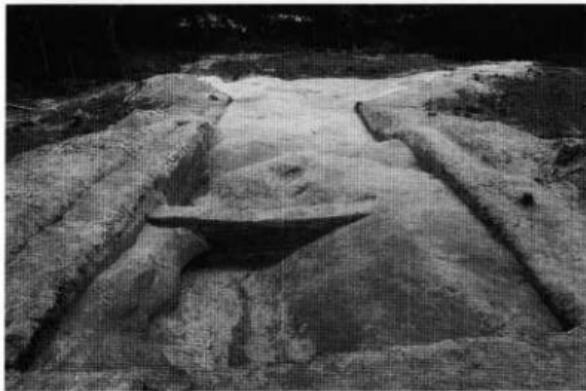
(1)



第1調査区全景
(南東から)



第1調査区全景
(北東から)



第1調査区全景
流路跡完掘状況
(西から)

図版 3 遺物散布地〔玉手山学園学校用地内遺跡〕(2)



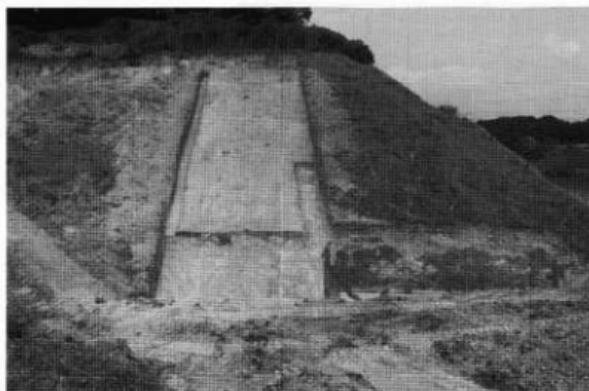
第2調査区全景
(西から)



調査地空中写真
(垂直、上が北)

図版 4

田尻峠第3地点遺跡第2次調査・別所石塚古墳第3次調査



田尻峠第3地点遺跡
第2次調査地全景
(西から)



別所石塚古墳
第3次調査
調査区全景
(北東から)



別所石塚古墳
第3次調査
調査区全景
(南東から)



瓦口森田遺跡
第3次調査
調査区全景
(北から)



遺物散布地
調査前の状況
(南から)



遺物散布地
調査区全景
(北から)



96-1次調査
調査区全景
(北から)



96-1次調査
遺物出土状況
(東から)



96-2次調査
調査区全景
(北から)

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 8
— 平成 8 年度 —

編集行 香芝市教育委員会
香芝市本町 1397 番地
印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町 3 丁目 464 番地